

「城野遺跡の現地保存をすすめる会」の活動趣旨に賛同します

城野遺跡は、弥生時代の墓制、集落を含めた当時の社会構造を語る上で、北部九州のみならず西日本でも最も重要な遺跡のひとつです。

九州最大規模の方形周溝墓の発見の意義、そこに埋葬された二人の幼少人骨の社会的位置づけ、石棺木口石に描かれた絵画文様の解釈、さらには九州では滅多にみつからない玉作り工房と玉作りのための豊富な道具類から見える玉製作技術の系譜、ヒスイや碧玉などの他地域産石材の入手の問題、漢帝国との交流をもしめす楽浪系土器やガラス玉の出土の意味など、どれをとっても一般的集落では考えられないほどの重要な研究素材と地域文化解明の視点を提供してくれています。

城野遺跡の発掘調査が終了後、なんとかこの遺跡を保存し整備・活用することができないか、とわたし達考古学関係者や、九州・沖縄、そして全国の大学関係者、行政担当者の理解と協力を得て、九州考古学会、日本考古学協会が保存・活用の要望書を文化庁はじめ、県、市関連行政機関に提出しました。

その後約3年が経過し、わたし達は保存・整備のための様々な努力がなされているものと思っていました。ところが、2013年、福岡財務支局が公共広報により、城野遺跡が所在する土地が公的団体向けに売却の手続きに入ったという情報が入るや、北九州市が保存を断念し、現地に埋め戻していた2基の石棺の取り外し、玉作り工房に関しては記録保存という方針が示されたと聞きました。またつい最近では公的機関への売却期間が過ぎたため、民間売却の一般競争入札まで進められていると聞き、遺跡の保存交渉がどのように進められてきていたのかという疑問とともに、市民の歴史的財産である本遺跡が市民に何も知らされないうちに消え去ることは、郷土の若者達、また北九州市の将来を担う子ども達に取り返しのつかない損失ではないかと思えるのです。

困難な課題は色々あるとは思いますが、城野遺跡周辺には私たち考古学関係者なら誰もが知っている重留遺跡が存在します。日本でただ一つ、弥生時代最高のマツリの道具広形銅矛を埋納したままの状態で見つかった竪穴住居が、すぐ近くに眠っているではありませんか。当時から様々な苦難と障壁を克服して保存・活用に努力した関係者の方々がいたではありませんか。

どうか、この城野遺跡が現地に保存され、生きた歴史教材として、また北九州市民が弥生時代人と語り、過去から現在、未来へとずっと続いてほしい郷土愛を育む場として、整備・活用されることを願うものです。

そのための活動を、多くの時間をさいて継続しておられる「城野遺跡の現地保存をすすめる会」の皆様の趣旨に賛同し、以下に個人として署名を致します。

平成 27 年 11 月 28 日

- 2015/11/28-29 日本考古学協会九州・沖縄連絡会で集められた「城野遺跡の現地保存をすすめる会」の活動趣旨への賛同署名です。
※当日、考古学の専門家(職業は大学教授、国立博物館、県立博物館、吉野ヶ里遺跡、県や市の教育委員会の方々)84名から署名が寄せられました。今後も増える予定です。